

私が大学を卒業したのは1983年、37年前であるが、その年、同級の研修医が担当だった入院患者さんを近くの企業に連れて行き、開発中のMRIを使って脊椎の撮影を試みたことがあった。出来上がったフィルムを見て、「あんなもん何にもわからんぞ」みたいなことを言っていたように記憶している。Wikipediaで調べると、日本の企業がMRIの開発にしのぎを削り、国内で臨床用として病院に導入され始めたのがちょうどその頃だったようである。そういった意味では、私は知らず知らずのうちにMRIの発展とともに整形外科医としての道のりを歩んできたことになる。

1986～89年に赴任していた公立総合病院にはいち早くMRIが導入され、早朝、技師さんの来る前から脳外科の先生たちだけで機械を立ち上げ、入院患者さんの脳や脊椎のMRIを撮影していた。今では信じられないことだろうが、epoch-makingな新技術に、皆ワクワクしていたように思う。早く、多くのMRI画像を手に入れば、新しい知見もたくさん得られ、学会発表にも事欠かなかったのだろう。当時、腰椎最外側ヘルニアの概念も一般的ではなく、長い間入院してもらって脊髄造影や根ブロックを何度か行っても診断のつかない患者さんがいて、とてもつらかったことを思い出す。今なら外来でMRIを撮ってすぐ診断できる。

2004年には、術前のcine-MRIで巨大硬膜外くも膜嚢腫のくも膜下腔との交通孔を見つけ、小さな開窓部から交通孔を閉じるだけで完治させることができ、*Spine*に発表した。その前に経験した症例では広範囲の椎弓切除を余儀なくされたので、文明の利器のパワーに感心したものである。

今や脊椎脊髄外科にとってMRIは欠かせない検査になっている。たしかにX線撮影が基本であろうが、スクリーニングツールとしてはMRIに優るものはない。ただ、機器の性能、撮像法や画像の解釈も日ごとに新しくなっており、catch up withしていくのが大変である。そんな中、今回の「脊椎脊髄MRI再入門—これだけは知っておこう」は重宝される企画になると思う。中でも「撮像法のリスト」は、知識を整理し適切なオーダーをするのに、脇に置いておくにとっても役に立つだろう。

2020年代が始まる。10年後の脊椎脊髄外科はどのようになっているのだろうか。

(根尾昌志)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
小山素麿 小柳知彦 田代邦雄
国分正一 服部孝道

編集委員

徳橋泰明 (編集委員長)
金 彪 (副編集委員長)
青木茂樹 亀山 隆 園生雅弘
高橋敏行 高安正和 谷 論
永島英樹 中村雅也 根尾昌志
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志

Vol. 33 No. 1
(2020年1月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価 (本体2,500円+税)

(配送料別)

年ぎめ予約購読料 33,300円+税

送料弊社負担

発行/株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>
(担当: 山岸)

印刷所/三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所/

(株)文栄社

TEL 03-3814-8541

(株)ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.

6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2020,

Printed in Japan

JCOPY <出版者著作権管理機構 委託出版物>

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前、出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。